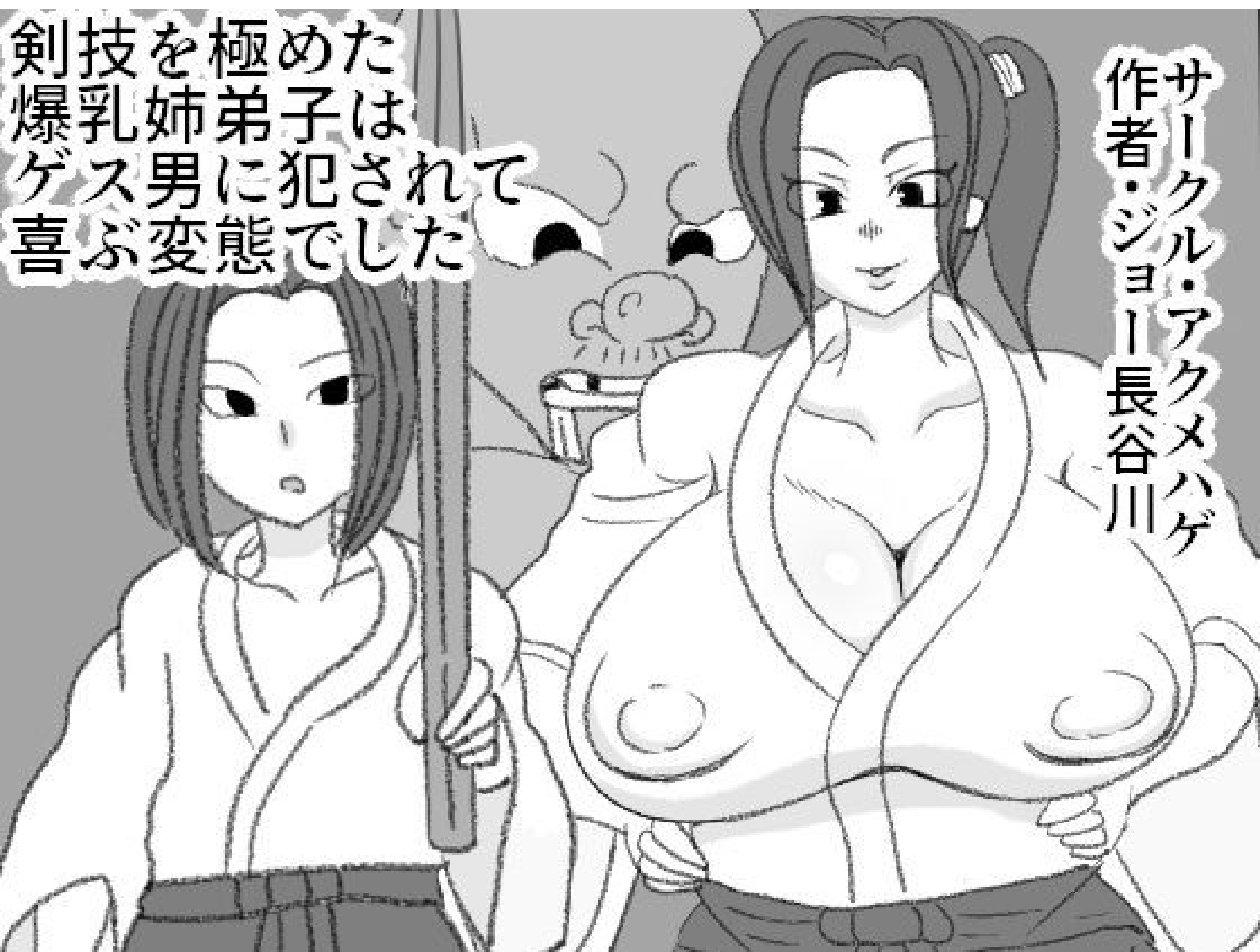


サークル・アクメハゲ
作者・ジヨール長谷川

たは犯された
め子に態
極弟男変
を姉男
技乳ス
剣爆ゲ喜



「ミキ姉、今日こそは
一本取ってみせるよ」

僕は寺田拓斗
無元一刀流の次期当主だ

一三十分後ー

(糞っ……!)

(駄目だ……)

(全く歯が立たないっ!!)

「どうしたタク坊、
もう終わりか？」

道内で神童と
呼ばれている僕だが
ミキ姉には全くもって
歯が立たない

「女一人にも
勝てないのか？」

「その調子じゃ」

「いつまで経っても
一人前にはなれんな」

「言うようになったなア」

「タク坊」

「どれだけ成長したのか
見せてもらおうか」

「で、まだするか？」



「う……
降参するよ……」



「またまた！」



「姉ちゃんの勝ちだな！」

高島美紀

通称ミキ姉

とても強い僕の姉弟子

僕の父であり師匠でもある
源一斎と同じくらい強い

父は跡継ぎである息子の僕が
女性であるミキ姉に勝てない事を
快く思っていない



追い出そうにも実力は確かであるため
父にとつては目の上のこぶの様な存在らしい

その上ミキ姉見たさで
うちの道場に入門した
門下生も多い



感謝こそすれど
憎む理由など
まるでないのだ



そんなミキ姉
目的にも
厄介な奴はいる

品の無い
権八という男だ

ザッ…

この権八という輩は
ミキ姉に敬意も無く

いたずらに道場に来る下種で
どうしようもない屑野郎だ

「オレが勝ったら
その場ですぐに
処女膜ぶち
破ってやるぜえ?」

「覚悟するんだなあ!」

「おう
お前が勝ったら
処女を奪うなり
殺すなり」

「この体をお前の
好きにしろ」

「ひやつはあ!」

「おめこ頂きい!」

勿論遊び半分で
道場に来てる奴なので

完膚無きまでに
滅多打ちにされる

「おいチビ！」

「次舐めた態度
取ったら承知しねえぞ！」

この男は僕にすら
勝てる見込みも
無いのに口だけは
一丁前だ

そんな事を言いつつも
僕もそんな輩と変わらない

いつの間にかミキ姉を
好きになってしまっ
ているのだから

肝心のミキ姉は
僕の事を男として
見ていないらしい

昔一度だけ
ミキ姉に尋ねた事がある

「ミキ姉はさ……
将来結婚したい相手と
かっているの？」

「剣の事はっかり
考えてるからなあ……」

「恋愛感情
とかっていうのも
よーわからんし」

「うーむ……」

「戦いたい奴
ならいるけど
結婚相手は
考えてなかったなあ」

「このまま婆さんにな
るまで剣の道を進む
っていうのもなあ」

「つてなるとお……」

「解決策としてはあ……」

「まっ！いい歳なっても
嫁の貰い手がなかったら」

「タク坊が代わりに
貰ってくれよなっ！」

「……うん」

この時にすぐにでも
告白していれば
良かったのかもしれない



「ぐへへ…」

「やっと恨みを
晴らせるぜ」

「糞アマア」

「修行の成果
に感謝だな」

「辱めてやるぜ」

「なんということだっ」

「嘘だ……」

「有り得ない……」

「あの美紀がチンピラにっ!？」

「はは……」

「凄いつ!」

「凄いぞ権八!」

「これが敗北かっ!」

ミキ姉は一切
悔がる様子も見せず
寧ろ初めて負けた事に
興奮している様子だった

「お前いつから
そんなに強くな
ったんだ?」

「黙って
逃げ」

「脱げ」

「門下生の前で
犯してやるよ」



「……」

恥じらう様子もなく
ミキ姉は堂々と
胴着を脱ぎ

「約束だからな
受けて立とう」

「さあ、好きにしな」

門下生達の前で
生まれたままの
姿を晒した



「と、父さん！」

「神聖なる道場で
あんな下種の好きに
させて良いの?！」

「ふん」

「あの女が約束した事だ
ワシは知らんな」



「だ、だけどっ！」

「弱者は強者に
従うのみ」

「それが無元流の思想だ」

(権八の奴に裏で稽古
させた甲斐があったな)

(これであの女はチンピラに
負けた事で面子は潰れ
腹ボテにでもなれば追い出せる)

「色香に惑わされおつて」

「我が息子
ながら情けない」

「見ろ、あの女を
初めての凌辱に
期待の顔をしているぞ」

「とんだ淫乱娘だな」

嘘だ……
ミキ姉が
そんな……

「にしても
でけえ乳だな」

「ぐへへ……」

（げへへ）

（源二師匠も
悪い人だぜ）

「乳のデカさは
他の女に負けないよ」

「まっ、剣の腕以外での
唯一の自慢だな」

（息子の前で
ミキを犯して
やれなんてよお）

「そんじゃあ」

「早速この生意気なデカ乳を……」



「おいミキィ！」

「今にオレのチンポ無し
じゃ生きていけねー
体にしてやるからなあ」

「ふんっ」

「誰がお前なんかの女になるかっ！」

「ほらっミキィ！
早くオレ様の
チンポに奉仕しろ」

「これが男の……」

ボロヘツ

グニッ

グニッ

「ごっごうか？」

「初めてだから」

「よく知らないけど…」

ミキ姉は優しく権八の
モノを手で包みながら
おずおずと亀頭を舐め始めた

「ダメだな」

ドンッ

「いいかお前ら」

「雌の扱い方
ってもんをよく見とけよ」

「おっ?!」

「そのでけえ乳で
奉仕すんだよ! バカ!」

じゅるじゅる

権八は馬乗りのまま
ミキ姉の乳首を両手でつまみ
竿を谷間にすべりこませ

力任せにミキ姉の頭を
押さえこんだ

ぐちゅん

「もがっ!」

「オラオラ!
しっかり
啜えやがれ!」



がつぽ

(こんな男に
私がいい様に
されるなんてっ!)

ぶっちゅ

ぎゅっぽ

ぐっぽ

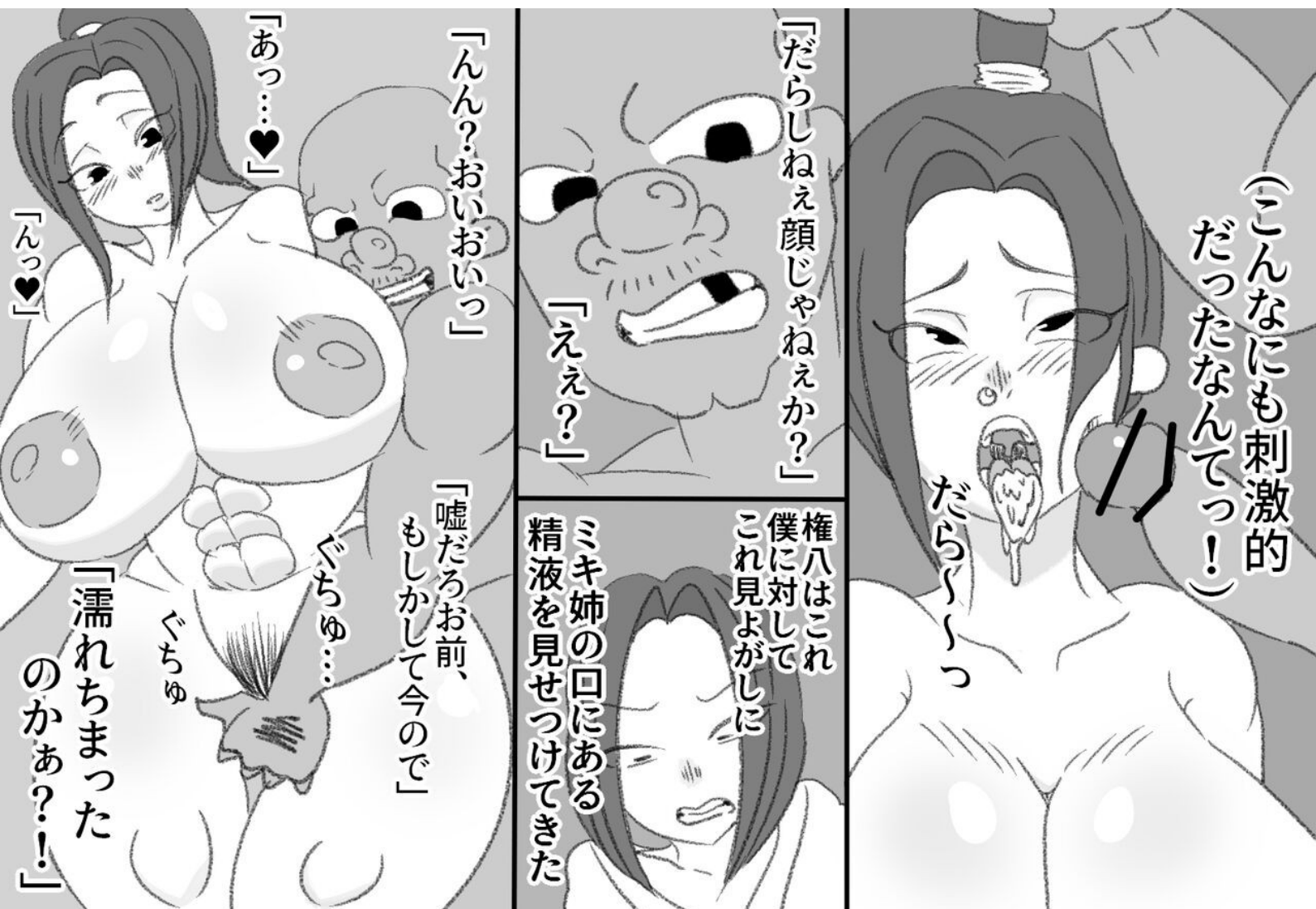
(今まで負けた事
なんかなかったのにっ!)

(負ける事が……)

(こんなにっ……
こんなに……)

「んうっー!!」

ぎゅっぽ
ぎゅっぽ
ぎゅっぽ



(こんなにも刺激的
だったなんてっ！)

だらりっ

「だらしねえ顔じゃねえか？」

「ええ？」

権八はこれ
僕に対して
これ見よがしに

ミキ姉の口にある
精液を見せつけてきた

「んん？おいおいっ」

「嘘だろお前、
もしかして今ので」

ぐちゅ…

ぐちゅ

「あっ…♥」

「濡れちまった
のかあ?!」

「んっ♥」

「ぐひひっ！」

「濡れ濡れだぜえ」

ぴちや...

ミキ姉は権八に
されるがままに
喘ぎ声を漏らしていた

ミキ姉の喘ぎ声と
権八の舐める音が
静かに道場に響いた

くちゅ.....

「おっ♥」

ぴちよ.....

権八は両手でミキ姉の
大きな尻を両手で抱え
いやらしく音を立てながら
アソコをしゃぶりだした

「んひっ♥」

「ハア.....♥」

「フウッ.....♥」

「まな板の上の鯉とは
この事だな！ガハハ！」

ぐっ.....
みゅ.....

「ぐひひひっ！」

「宣言通りマンコに
オレ様のモンを
ぶっ挿してやるぜ！」

「処女膜にお別れを
言うんだな！」

「クッッ……!!」

「こんな事なら
早く気持ちを
伝えていけば……!!」

「ご、権八！」

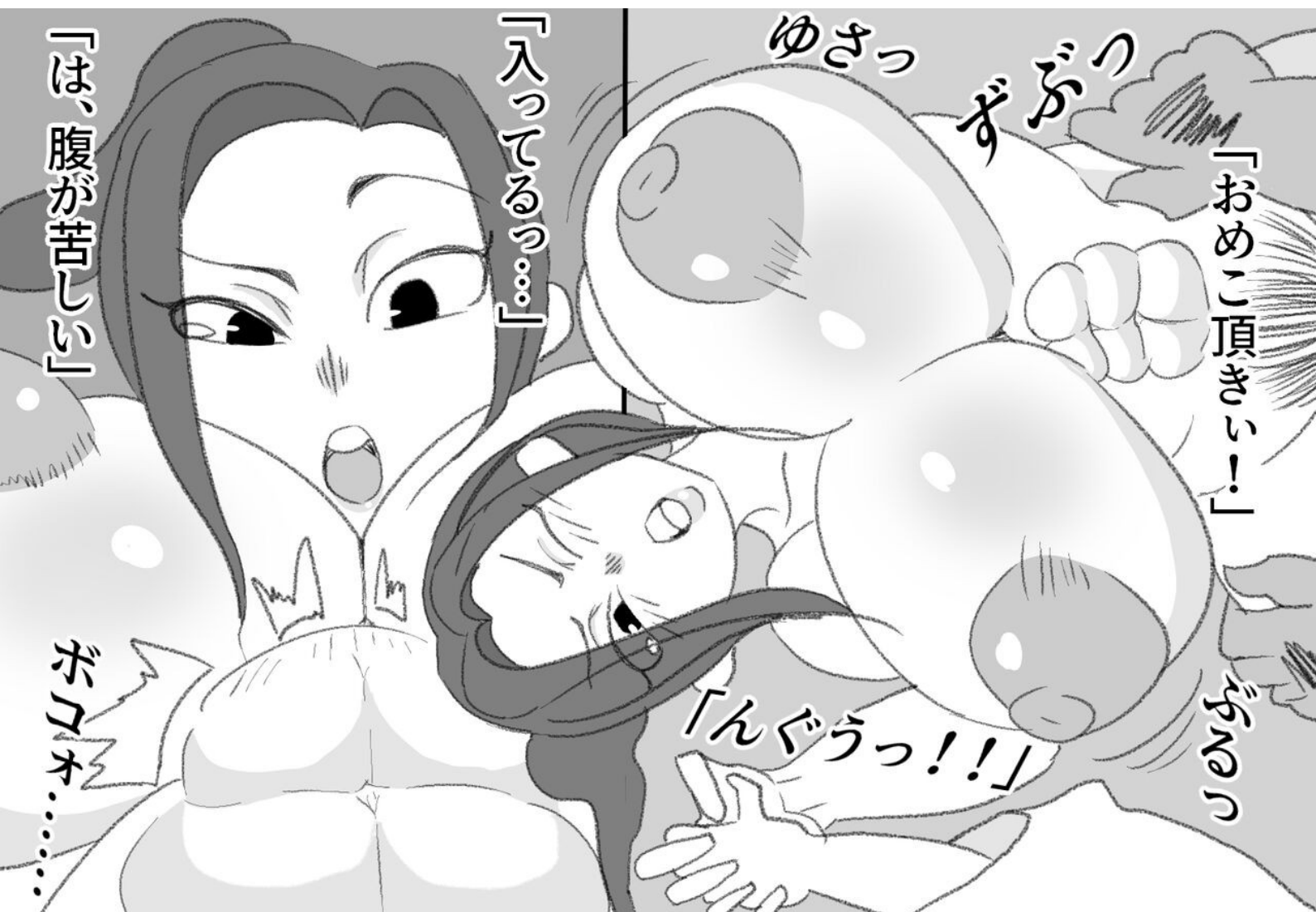
「ちよっと待ってくれ！」

「タク坊っ」

「手を」

「握ってて
くれないか？」





「は、腹が苦しい」

「入ってるっ…」

ゆさっ ずぶっ

「おめこ頂きい!」

「んぐうっ!!」

ボムォ……

じゅん

「ぐへっ
処女マンコの
締りは最高だなあ」

「ふう…」

「ミキ姉！
大丈夫?!」

「ああ、タク坊が
手握っててくれたから
痛くないぞ」

ミキ姉の股から
赤い血がどろどろと
権八の竿を伝っていた







ぐむっ

『かふっ♡』

『痛いっ♡』

痛がつているミキ姉は
痛いと言いながらも
どこか気持ちよさそうだった

『そらっ!』

ほむっ

『オラッ!』

つきゅっ♡

『さっきのイラマチオで
分かってんだよ』

『テメーが痛めつけられて
喜ぶ変態だって事をよ』

「ぎぎいっ♡」

「初めての敗北に
初めてのセックス！」

「オメーにはご褒美
でしかないようだな！」

ぎゅっ

「コイツ首を
絞められて
感じてるぜ！」

「見てみろよ
クソガキ！」

「か…はっ…♡」

「ああ…♡♡」

悔しいが権八に
言われた通りだった

ミキ姉は首を
絞められて感じていた

「いっ…おっ…♡」

グググッ…

権八の指がメリメリと
首に沈み込む事に
顔が真っ赤に紅潮していく

「あ…♡」

ピキ

ピキ

それでも

それでもミキ姉は
嬉しそうだった

ブクブクッ

涙も出て
こめかみにも
青筋が走っている

その証拠に

ミキ姉の手が

僕の手を離れて権八の
背中に乗っかっていた

「えっ…」

「ちゅ…♡権八い…♪」

むちゅ♡

強く抱きしめながら

権八にキスをせがんでいる

何か

夢を見ているような

「キス…いっぱいキスしてくれ♡」

気分だった

「ミキ姉っ!!」

えれえ♡

しゅろ♡

「どうしたのっ?!」

「さっきまで痛がってた
じゃないかっ!」

「タク坊……」

「前に恋愛感情が
わからないって言ったろ？」

「今になってわかったんだ」

ドチュムツ♡

「権八に」

「殴られて」

「首を絞められて」

グチュ♡

「犯されて」

ヌチュ♡

ズチュムツ♡

「凄い胸が
キュンとするんだ！」

「私権八を好きなんだ！」

「きつとこれが恋だ！」

「愛だ！！」



ちがうよミキ姉……
それは好きって
感情じゃないよ
ミキ姉……

やめてよ

お願いだよ

どちゅっ♡

そんな顔しないでよ

「なあ権八♡」

「権八は私の事好きか？」

ずっちゅ♡

ぬっふ♡

「おうよっ！大好きだぜ！」

（都合の良い肉便器としてな！）

「よく見とけクソガキ！」

ぱんっ♡

「このマシコにオレの
精子が大量に
流れる様をよっ！」

ぱんっ♡

「あぁっ♡」

「出してくれ権八！」

「お前の子を産みたい!!」

ぱんっ♡

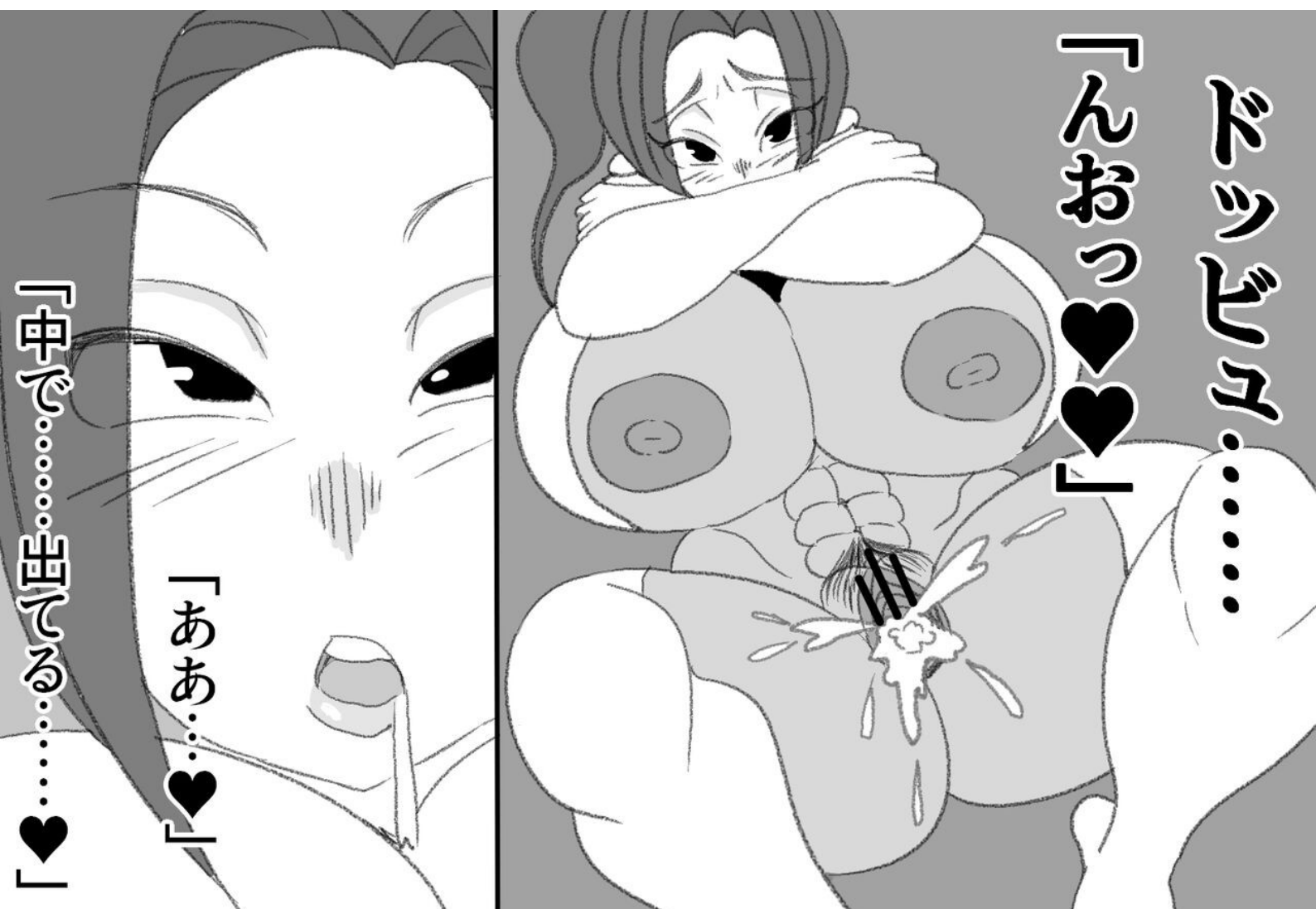
だら〜♡

やめろお……

見せるなあ……

ぱんっ♡





ドゥドゥ...

「んおっ♥♥」

「ああ...♥」

「中で...出てる...♥」

権八は亀頭に付いた残り汁を
ミキ姉の下腹部に塗りたくり

ミキ姉は権八に
キスをしようと
している

僕はミキ姉の手を
握ろうと思ったが

必要とされて
いない事を
思い出し

自分の手を

そっと

冷たい床の上に置いたのだった

